

第一章

戦国武術から近世武芸へ

戦国期の実戦的武術を武士の精神を養成する道（武芸）へと革新をもたらしたのは上泉秀綱（かみいずみひでつな）（1508～1577?）であった。彼が生きたのは、天文12（1543）年の種子島への鉄砲伝来国内での生産も可能となり、織田信長が軍事採用を始めとして、軍における鉄砲の戦場使用が開始された時代である。彼は、鎌倉以来の戦闘の大前提となっていた弓馬劍鎗による命懸けの対峙を大前提とした「向き合い」の精神とは質の異なる精神性に気が付いていたのではなかったか。それはとりもなおさず、砲弾による「間合」なき殺戮が可能となれば、武士の武士たる精神性をも失われることへの危惧であつたらう。

平和な世の中へと向かう戦国末期に出現した上泉が永禄9（1566）年に柳生宗厳（やぎゅうむねよし）（1527～1606）に相伝した新陰流の「影目録」の記述にある「中古念流、新当流、陰流」、「上古の流」、それらの起源となつた「文殊上將が智恵の劍」といった歴史認識に基づき、剣道前史の概略を述べる。

剣道の底流には、命懸けの実戦によって進化・深化された感覚・感性の拠り所として開示された体験知が流れている。その体験知は、お互いが命を懸けて向き合った「場」の感覚、「間」の感覚、そしてその時の身心の内的統一性と外的能動性を司る「気」の感覚などが統合的に言説化されたものであり、勝負に臨む者の身心の在り方を示す理念形成へと結実していく。

第一節 剣道前史

1 剣道の歴史書

これまでに出版された剣道関係の書籍を網羅している『剣道を知る事典』（東京堂出版、平成21年）の「剣道関係文献一覧」によれば、明治以前（～1867年）に刊行されたものは88冊、戦前（～1945年）は229冊、戦後（1950～2009年）は656冊に及ぶ。

その中で、戦前に剣道の歴史書として出版された主な書籍は3冊。京都帝国大学に提出された学術書であり後に武道専門学校¹の教科書ともなった下川潮『剣道の発達』（大日本武徳会、1925）、山田次朗吉『日本剣道史』（東京商科大学剣道部、1925年）、堀正平『大日本剣道史』（剣道書刊行会、1934年）である。これらは戦後剣道の復活に力を注いだ世代にとって

は、教科書的な存在であったものの戦後における扱いは慎重であった。

戦後に著述された剣道の歴史関係書としては、庄子宗光『改訂新版 剣道百年』時事通信社、1996年）、富永堅吾『剣道五百年史』（百泉書房、1971年）、中村民雄『史料近代剣道史』（島津書房、1985年）、岡田一男『剣道小史―解りやすい剣道史』（体育とスポーツ出版社、1987年）、大塚忠義『日本剣道の歴史』（窓社、1995年）、全日本剣道連盟『剣道の歴史』（全日本剣道連盟、2003年）、そして最新の刊行本では酒井利信『英訳付き 日本剣道の歴史』（体育とスポーツ出版社、2010年）などが挙げられる。

これらの書籍はいずれもそれぞれの特徴があり興味深い内容が盛り込まれている。戦後剣道の在り方を見据えた上で、その歴史的展開を記述したものは『剣道五百年史』が挙げられるが、コンパクトにまとめられ解りやすいのは岡田一男『剣道小史―解りやすい剣道史』であろう。

岡田一男（1915～2009）氏は、歴史家として宮本武蔵を始め剣豪についての著作があるが、大学の剣道史を担当するようになり、大学生、高校生、一般の剣道愛好家を対象に「実技を学ぶとともに、これを育んだ歴史を知り、先人の開拓した文化としての剣道を学ぶ」ために常識的剣道小史を試みたという。ここではその第一章に記述された「日本刀の歴史と剣術」の要旨を確認しつつ、有職故実の専門家である近藤好和氏（こんどうよしかず）による刀剣に対する見解を参照

しながら、刀剣の文化的意義を踏まえた操作法（技法）について私見を述べたい。

近藤氏の著作には、『弓矢と刀剣 中世合戦の実像』（吉川弘文館、1997年）、『中世的武器の成立と武士』（吉川弘文館、2000年）、『武器の日本史』（平凡社新書、2010年）、などがあるが、そこに見られる近藤氏の識見に注目するのは以下の理由による。

近藤好和氏は、本来実用のために製作された武器・武器が、現在は美術鑑賞の対象としての観点からのみ扱われ「実用を無視して、歴史的にも鑑賞面だけを強調するのは大きな間違いである」（『中世的武器の成立と武士』、2000年）との観点から、実際に武器・武器がどのように使用されたのかを言及し、他の歴史学研究との結びつきなどにも着目した論考を発表している。特に戦後の刀剣界では「刀剣を武器と見ること自体がタブー視され、刀剣は全くの鑑賞とその前提としての鑑定の対象として扱われている」と言及し実用論からの視点が欠落していると指摘。「武器の美術的価値や工芸技術的な意味ばかりを考えては、武器の持つ歴史資料としての豊かな価値を封じ込めることになる。武器が実用品、つまり戦闘の道具として製作・使用されたことは、紛れもない歴史的事実である。実用論を考えなければ、武器の本質を見失うことにもなる」（『武器の日本史』平凡社新書、2010年）と言及している。

近藤氏の立脚点は、筆者が感じている戦後剣道界の状況と合わせ鏡のごとく似るもので、根

底には、刀剣の実用性が排除され、その文化性を問うことをもタブー視されたことがある。

剣道は、戦後装いも新たに「打突文化」である競技スポーツとして発展し、一方で「斬突文化」ともいえる刀剣の実用性や象徴性については、「古武道精神と技法の保存振興」を目的とする日本古武道協会に所属する各古流の示す「型」に委ねられているというのが現状である。もとより古流の型文化と剣道の競技文化は連動するものであるとは誰もが感じていながら、斬突と打突の技法の連続性を問うことはなおざりにされているのが現状である。「折れず、曲がらず、よく切れる」という要件を満たすために工夫された鑄造しのぎづくりの湾刀わんとう、つまり日本刀の発明が剣道の出发点であることは誰もが知っていることである。しかし、日本刀の構造やその操作法の歴史についてはあまり語られることはなかった。それが前提となつて競技化へと新たな価値を産みだし近代剣道（竹刀剣道）へと移行してきたにも関わらず、である。その間の技法の変遷や文化性を問うことは必須不可欠であるが、その研究はようやく端緒に着いたといふべきであろう。その意味で、文献学的方法で刀剣の文化に肉薄する酒井利信さかいとしのぶ氏の『日本精神史としての刀剣観』（第一書房、2005年）はその出发点に立っていると云つてよい。日本武道館から出版された酒井氏の著作『刀剣の歴史と思想』をご一読いただきたい。

剣道の歴史と技法を考えるに当たつて、まずは、剣道が抱えてきた心と体の一致した技法

(身心一如の技法) が各時代の流れに沿ってどのようなように自覚されていたかを「日本刀」の視点から認識しておく必要があるだろう。本節では日本刀の変遷に注目した岡田氏の見識を紹介しながら、近藤氏の見解を参考に剣道の技法の変遷を追いたい。特に現代剣道と繋がる「打刀」が流行した室町時代から戦国時代に注目しておきたい。

2 刀剣の歴史と剣術

岡田氏『剣道小史』では、第一章「日本刀の歴史と剣術」と題し、各時代の刀剣の形状が当時の気風をも表現するものと位置づけ、その変遷を基準に剣道の文化を説明している。

- 第一期 上古時代（古墳時代～平安中期）
- 第二期 平安末期～鎌倉期
- 第三期 鎌倉中、後期
- 第四期 吉野朝時代

第五期 室町時代～戦国時代

剣術流儀の発生

発生当時の諸流儀

武者修行の流行

第六期 桃山時代

第七期 江戸時代

前期—実戦有用時代

中期—花法剣術時代

後期—試合剣術時代

①日本刀前史

第一期は直刀期で、古墳からの出土物や奈良時代の遺物である正倉院御物の刀剣から推測する以外にない。大陸からの輸入された鍛刀の技法が伝授され鉄に対する意識が活発化した。大陸のものには及ばなかった。形状の特色は平造（ひらづくり）（鑄のないもの）、切刃造（きりはづくり）（鑄の線が刃部に寄ったもの）、切先両刃造（鋒のみが両刃となっているもの）の三種に大別されるが、平造が

最も古い。カタナは片刃の意で、両刃の剣を半分にした形で後世の刀の原形である。切刃造は実用上の経験から後に出来たもので、剣技上から考えると平造と切刃造は、「斬ることよりも突くこと」に主体性があった。切先両刃造は、先の方が剣、元の方は大刀であり、「突くことと斬ることを兼ねた」ものだ。

ここで、近藤氏の古代の刀剣や兵制についての識見について『武具の日本史』（平凡社新書、2010年）の記述を引用し紹介することにする。

近藤氏の武具の歴史的考察は、遺品・文献・絵画の三資料によって「表記・和訓・構造の対応関係を時代に即して正しく把握し」総合的になされている。

刀身の材質は当初は石製で、金属の刀身は、最初に青銅製、続いて鉄製が大陸から伝来した。日本に伝来した青銅製刀剣は、銅剣・銅矛・銅戈。剣は斬撃・刺突を主機能とする両刃の刀剣で、中国では両刃の刀剣を「劍」といい、片刃の刀剣を「刀」と総称した。矛は刺突を主機能とする両刃・長柄の刀剣である。中国では、「ほこ」の祖型で青銅器のそれを「矛」といった。戈は両刃の刀身を柄に直角に取り付けた打撃を主機能とする刀剣である。

一方鉄製刀剣は、長刀・短剣・「ヤリ」である。長刀は長寸・片刃の刀剣、つまり大刀であり、素環頭大刀という様式。短剣は短寸の剣である。「ヤリ」は両刃・長柄の刀剣。「三世紀頃か